

論題 中世における神秘思想

司会 早稲田大学 小山宙丸

提題：中世における神秘思想

——マイスター・エックハルトの

「神秘思想」と禅仏教

花園大学 上田閑照

提題：内在と超越——ハイデガーの「無」

とソクラテスの「ダイモニオン」

東北大学 岩田靖夫

(於 南山大学 1993. 11. 14)

司会

小山宙丸

これから、上田閑照、岩田靖夫の両講師を迎えて、「中世における神秘思想」と題するシンポジウムを開く。中世哲学会大会における連続シンポジウムの新たなテーマは、昨年来、「中世における神秘思想」と設定されているが、元来、このお二人を提題者とするシンポジウムは、その第一回目として、昨年に開催されることが予定されていた。しかし、上田講師が、昨年秋にはドイツでの仕事が決まっていたので、今年まで延期したのである。

そのために、昨年は、泉治典氏の司会のもと、少壮の方々を提題者に招いて、中世初期の教父における神秘思想に焦点をあてて開かれた。従って、本日のこのシンポジウムは、時代的順序では逆になるわけだが、その任務では総論或いは結論的なものとなることをご理解頂きたい。

本日の司会は私が務めさせて頂くことになったが、その理由は、両講師を比較的早くから存じ上げているということ以外にないと考えている。岩田氏をご承知のように、古くからの本学会の会員であるが、上田氏はこの学会の会員ではない。私は宗教学会の関係その他でお近づきの機会を得たのではないかと思いついているところだが、古

いことなので記憶が定かではない。

さて、このように、会員と非会員のお二人の提題者を迎えて、本日のシンポジウムをもつ目的は、単に中世における神秘思想について論ずるということに止まらず、広く、神秘思想とは何か、を考えるとところにあるのではないかと思う。私共のこの中世哲学会は四十年を越える歴史をもっているが、しばらく前から常任委員会の席上で、「中世哲学会は小さく固まってしまっているのではないかと、広く中世哲学の分野を越えた交流を考えねばならないのではないかと」という意見が出されていた。そういう状況を踏まえて、今日のこのシンポジウムになったと考える。

さて、紹介するまでもなく、上田先生は、中世神秘思想の主峰の一人であるエックハルトの、日本を代表する研究者であることは、皆様充分にご存知のところである。また、今年の学会では四人の発表者がエックハルトについて研究発表を行なったが、これは今までの中世哲学会では異例なことであり、これも中世哲学会として上田先生を歓迎している印であろうかと考えている。同時に上田先生は、仏教、ことに禅仏教についての優れた研究者であられることも、皆さんよくご承知の所である。早くも1965年に、本日のテーマと同じような論文をドイツ語で書かれ、スイスで発表されている。そのタイトルは *Der Zen-Buddhismus als Nicht-Mystik—Unter besonderer Berücksichtigung des Vergleichs zur Mystik des 'Meister Eckharts* である。このことを考えてみると、本日のテーマは、上田先生の、いわば生涯にわたる研究テーマでもあると言えるだろう。

一方、岩田先生は、既に申した通り、古い会員で、専門をギリシア哲学とされているが、同時に現代の問題にも、ことに神や絶対者に深い関心をお持ちである。その方面のお仕事の一つとして、『神の痕跡—ハイデッガーとレヴィナス』という書物を1990年に出されていることは、ご承知の通りである。

このような訳で、お二人共、中世哲学に深い関心をお持ちであるが、上田先生には、エックハルトを中心にして東西の神秘思想についてお話して頂き、岩田先生には、ギリシアと現代ということで、時間的に古今を貫いてお話頂くということになると思われる。すなわち、両先生の議論が相まって、空間的と時間的とに交差し、このシンポジウムの場で十字架型に出会い切り結ばれることが、大いに期待される場所である。